

## SS2-2 抗体医薬の現状と将来展望

○山崎 達美<sup>1</sup>

<sup>1</sup>中外製薬

1990年以降、癌を中心とした抗体医薬が上市されたことを契機に、激しい抗体医薬の開発競争が始まり今日に及んでいる。抗体医薬の標的疾患は癌領域のみならず、リウマチに代表される難治性疾患領域にも広がりを見せている。このような競合の中で、先行した抗体医薬に対して、新たな付加価値を付与した第二世代の抗体医薬の開発が活発になっている。新たな抗原に対する抗体医薬の創製だけではなく、抗体の分子形状の改変やトキシンなどとコンジュゲートされた抗体の創製が進められ、オリジナル抗体と比較してはるかに優れた抗体分子が設計されるようになった。一方、癌領域を中心として、低分子化合物による分子標的薬の成功事例が増えるに従い、抗体医薬については有効性のみならず、安全性や医療経済学的な評価の視点でも議論されるようになってきた。したがって、より差別化された医薬が求められるようになり、組み合わせる薬剤や適用される患者の選択などにおいて、いわゆるパーソナライズされた医療への流れの中で将来を語るが必要になってきた。科学や技術の革新的な進歩と先行薬剤の評価結果の集積、さらに医療を取り巻く環境変化が、ますます開発のハードルを高くしているともいえるし、ブレイクスルーができた医薬は次世代医薬として価値を高めることになるであろう。

上記のような視点を取りながら、弊社が取り組んできた抗体医薬研究開発の実例を紹介し、抗体医薬の現状と将来について述べる。